View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

学校教育実践学研究，2014，第20巻，115－124頁

小学校における体育授業の力量形成を促す現職研修に関する研究

木原成一郎・久保　研二・大後戸一樹・岩田昌太郎・徳永　隆治*
林　　俊雄**・村井　　潤***・加登本　仁****・嘉数　健悟*****

（2013年12月6日受理）

A Study on In-Service Training for Improving the Professional Development of Teaching Physical Education in Elementary Schools

Seiichiro KIHARA, Kenji KUBO, Kazuki OSEDO, Shotaro IWATA, Ryuji TOKUNAGA,
Toshio HAYASHI, Jun MURAI, Hitoshi KADOMOTO and Kengo KAKAZU

Abstract. First this study aims to clarify how elementary school teachers of B Prefecture informed their learning outcomes by in-service training of physical activities to their school colleagues. Secondary this study aims to clarify how in-service training of physical activities at D Elementary School in C City influenced improving school teachers' teaching in physical education. The results are summarized as following points. 1. Elementary school teachers of B Prefecture informed their learning outcomes to their school colleagues through 'in-service training meetings within their schools' or 'their daily job'. 2. D Elementary School Teachers have taught new teaching materials as learning outcomes from 'in-service training meetings of physical activities'. 3. Teacher X and Teacher Y learned teaching method and subject knowledge of physical education by team teaching experiences with PE coordinators as 'their daily job'. Teacher L learned the way of making unit plan, modification of activities and management of his class from his elder colleague K by dialogues about teaching in physical education as 'their daily job'. 4. It seems that it is important we make mentors' daily supports to mentees between PE coordinators and other school teachers.

1　研究の目的

1.1　教師の力量形成の場

静岡県の小中学校教師に1984年，1989年，1994年の３回，計4196名に行った質問紙調査に基づき，山崎準二（2002，p.208.）は「現在，自分の教育実践の質を高める上で最も意義があると感じているもの」を聞くと，採用された年代に関わりなく，「所属校での研修（1994年調査:31.0%）」「職場の雰囲気や人間関係（同：34.5%）」「自分の意欲や努力（同：41.5%）」の３項目が比較的高い指摘率であるという。教師は，まずは所属校での体験を通して教育実践の質を高めていると考えているといえよう。

他方，山崎準二（2002，pp.217-218.）によれば，「現在，自分の勉強の場として力点を置いて継続的に参加している研究会・サークル」を自分にとって最も重要であるものを一つだけ選択させた結果，「特にない（1994年調査：36.0%）」「自主サークル（同：20.5%）」「地区研究会：地区の学年・教科・領域別の研究会（同:19.0%）」の順に多かったという[注1]。

公立小学校の体育授業の力量形成に限定すれば，上記の指摘にあるように，やはり校内での同僚や先輩からのアドバイスや研究授業，実技研修で成長することが最も多いであろう。木原成一郎他（2012）は，３年間の臨時採用の体験を生かしA県でいい教師になろうと意欲に燃えて初任校に赴任した１名の教師の体育の授業分析とインタビュー調査をもとに，４年間でその教師が大きく成長した要因を以下の５点挙げている。それらは，

*安田女子大学，**梅光学院大学，***武庫川女子大学，****滋賀大学，*****沖縄大学

「①対象教師の成長への前向きな姿勢」,「②一人一人の教師の提案を取り上げ，子どもの学びを中心に学校を運営する管理職の役割」,「③同学年の同僚教師であるメンター[注2]からの援助」,「④子どもの学習について日常的に語り合う同学年の教師集団」,「⑤体育科の校外研修と校内研修（研究授業）への参加」である。ただし，木原成一郎他（2012, p.113.）が「『若手教師』が成長するためには，その成長を励ますメンターや子どもの成長について日常的に対話できる同学年の同僚の存在が不可欠なのである。」と述べるように，教師の体育の授業力量の向上を問題とすれば，まずは職場の同僚からの支援が最も大切であると思われる。

村井潤他（2011）によれば，M 市の地区研究会の体育部会19名への質問誌とインタビュー調査により，研修に参加した小学校教師は，次の３点の内容を研修に求めているとされた。それらは，①「新学習指導要領」や「教材」「授業」という体育科に関わる知識，②他の教師が実践している「具体的な実践事例」を知ること（若手教師），③体育科をともに探求する「他の教師とのつながり」を作ること（指導的立場の教師）である。この結果によれば，必ずしもすべての小学校に体育の専門家がいない現状では，体育を学ぶ仲間を求めて，上記の自主サークルや地区研究会の体育部会へ参加し，体育の教材や授業に関する専門的な知識や技能を向上させることも多いと思われる。

1.2　体育授業の力量形成と教職歴

松田・原（2013）は，地区研究会への所属と体育授業への意識調査の関係に関して，東京都，岡山県，三重県の小学校教師への悉皆調査で計17851名から回答を得た。調査の結果，地区研究会の体育部会への所属は教職歴３年以内が約18％，４年から10年以内が約21％と増大する傾向があり，11年から20年で約17％，21年以上で９％と減少する傾向にあった。

また，教職歴が３年以内から４年－10年と増加するにつれて体育を得意と回答した教師が約15％から約18％に増加し，不得意と回答した教師は約15％から10％に減少する。その後，教職歴が11年－20年から21年と増加するにつれて体育の得意な教師が約15％から約11％と減少していくのに対し，不得意な教師は約８％に減少したままを維持していく。

この教職歴別に見た体育部会への所属状況と体育の得意と不得意の意識の結果からすれば，小学校教師は採用から10年間に体育部会に所属する割合が多く，その間に体育授業の得意な教師が増加し不得意な教師が減少するといえる。体育部会への所属が教師の体育への得意意識に影響を与えると仮定すれば，この結果から，体育部会を通した体育授業力量の向上は主に採用後10年以内に実現する傾向があると推測できる。

これらの研究から体育授業の力量形成の過程への影響を考えると，10年以内の教職歴を対象に，勤務校や自主サークル，地区研究会で行われる研修を分析することが求められる。

山崎準二（2002）が指摘するように，地区研究会にはほぼ全員がいずれかの教科や領域に所属しているにもかかわらず，約２割の教員しか力点を置いて継続的に参加していると回答していないことは，地区研究会の研修内容や形態に課題があることを示している。ただし，小学校における体育授業の力量形成を促す現職研修の場としては，村井潤他（2011）に示されるように地区研究会体育部会が一定の役割を果たしていることも事実である。

必ずしもすべての小学校に体育の専門家がいない現状では，体育部会に参加した教員が，主な教師の力量形成の場である職場で，その成果をどのように同僚と共有しているのか，そして職場の教員の体育授業の力量形成にどのような影響を与えているのかを明らかにすることが求められているであろう。

そこで本研究は第１に，C 市及び B 県の地区研究会体育部会が主催する実技研修会を事例として，体育部会の小学校教師が体育科の校外実技研修で学んだ成果をどのような方法で自校の同僚に伝えているのかを明らかにすることを目的とする。さらに第２に，C 市 D 小学校を事例として地区研究会体育部会の実技研修の内容が D 小学校の教員の体育授業改善に与える影響を明らかにすることを目的とする。

地区研究会体育部会は主に以下の２つの形式で研修を行うことが多い。つまり，第１に教材研究を目的とした実技研修会，第２に指導計画作成や指導法及び評価の授業研究を目的とした研究授業と協議会である。本研究は教材研究を目的とした実技研修会を対象とした。

2　研究の方法（資料の収集と分析の方法）

2.1　質問紙調査

筆者らは質問紙調査の項目を設定するための予備調査として，2012年８月１日Ｃ市立Ｄ小学校で開催された地区研究会の実技研修会に参加し，参加したＣ市の教育研究会体育部会員に対し，体育授業に関する研修で学んだ内容を勤務校の先生方に伝達する方法に関する質問紙調査を行った。配布は８月１日に行い回収は10月24日に行った。回収数は18であった。質問項目は，「⑴これらの研修内容を自分の指導する体育授業の内容にとりいれようと考えておられる場合，どの内容をどのようにとりいれようと考えているかお書きください。」と，「⑵これらの研修内容を自分の勤務校で同僚の先生方に紹介し伝達しようと考えておられる場合，どのような方法で誰に紹介し伝達しようとしているかをお書きください。」の２項目であった。得られた自由記述をKJ法的な帰納的方法で分類し，カテゴリーとその相関図を作成した。なお，カテゴリーとその相関図に関して，共著者による「仲間同士での検証」（メリアム，2004，p.298.）を行うとともに，Ｄ小学校の体育主任として実技研修会を運営したＷ教諭の「メンバー・チェック」（メリアム，2004，p.298.）を受けた。

その結果，校外研を校内で伝達する方法として，「実技研修」と「体育部会」の小カテゴリーからなる「校内研修会の開催」という大カテゴリーが得られた。さらに，「合同体育」と「行事で」の小カテゴリーからなる「授業や行事で実技を通して」という中カテゴリーと，小カテゴリー「同学年・同僚との対話」からなる「仕事の中で伝達」という大カテゴリーが得られた。

この予備調査で得たカテゴリーをもとに質問項目を作成し，質問紙調査を行った。対象は，2013年８月８日Ｃ市立社会教育施設で開催されたＢ県全体の地区研究会の実技研修会に参加したＢ県の教育研究会体育部会員200名に対して行い，77名から回収した（回収率38.5％）。質問紙では，予備調査で得られた小カテゴリーを字句修正して設定した５項目ごとに，これまで体育授業の研修内容を勤務校の先生に「伝えた」か「伝えなかったか」のいずれかを選択させた。また，他の項目の回答が不適切であっても，適切に記入されていた項目についての回答は結果に含めた。

2.2　インタビュー調査

筆者らは，Ｃ市立Ｄ小学校の４名の教員（若手教師２名，中堅教師２名）及び学校長１名に2013年８月19日に体育の現職研修に関するインタビューを行い，トランスクリプトを作成した。松田・原（2013）の結果から体育部会を通した体育授業力量の向上は主に採用後10年以内に実現すると推測されたので，インタビューは採用後10年以内の教師を対象に行った。また，木原成一郎他（2012）により，教師の授業力量の向上は管理職の役割に影響を受けると考えられるため，学校長にインタビューを行った。

表１　体育部会に所属する教員のコンテクスト

氏名	性別	校務分掌	教職年数	N小経験
K	男性	体育部会	B県，採用後7年目	3年目（O市小学校4年勤務後）
L	男性	体育部会	B県，臨採1年，採用後3年目（卒業4年目）	3年目（H市小学校１年勤務後）

表２　体育部会教員へのインタビュー項目

⑴　Ｄ小学校に赴任されて3年間の経験に関して，特に体育授業に関して印象に残っていることがあれば自由にお答えください。
⑵　教科研体育部会の校外研修で学んだ内容は，先生の体育授業の力量形成や体育授業の改善，子どもの学習にどのように影響を与えていますか。
⑶　教科研体育部会の校外研修で学んだ内容を，先生はどのように自分の学校全体の体育授業改善に役立てようとされてきましたか。

表３　体育部会に所属しない教員のコンテクスト

氏名	性別	校務分掌	教職年数	N小経験
X	女性	音楽部会	B県，採用後6年目	2年目（O市小学校4年勤務後）
Y	女性	国語部会	O県，臨採1年＋初任後2年，B県，1年（卒業4年目）	1年目（K市小学校3年勤務後）

表４　体育部会に所属しない教員へのインタビュー項目

⑴　Ｄ小学校に赴任されて3年間の経験に関して，特に体育授業に関して印象に残っていることがあれば自由にお答えください。
⑵　Ｄ小学校で行われている体育授業に関する校内研修は，先生の体育授業の力量形成や体育授業の改善にどのように影響を与えていますか。
⑶　Ｄ小学校で行われている体育授業に関する校内研修は，先生の体育授業における子どもたちの学習にどのような影響を与えているとお考えでしょうか。

表５　学校長のコンテクスト

氏名	性別	校務分掌	教職年数	N 小経験
Z	男性	校長	1976年採用，2013年度で退職（60歳）	3年目

表６　学校長へのインタビュー項目

(1)　先生の体育授業に関するお考えや体育授業に関する研修とのかかわりを自由にお答えください。
(2)　C市の小学校における体育授業の位置に関する現状について，学校長としての先生のお考えを自由にお答えください。
(3)　D小学校の運営について留意されている点について，また教員研修について留意されている点について，学校長としての先生のお考えを自由にお答えください。

インタビューは，対象者別に表２，表４，表６のような項目による「半構造化インタビュー」として行った。体育部会教員へのインタビュー項目の(1)(2)と体育部会に所属しない教員へのインタビュー項目の(1)(2)(3)は同一であるので，この４名へのインタビュー結果のトランスクリプトをまとめて分析対象とした。そして，学校長へのインタビュー項目については単独で分類対象とした。

インタビューのトランスクリプトを意味のまとまりごとに区分し，内容を示すカテゴリーをつけ，KJ法的な帰納的方法で分類し，まとまったカテゴリーごとに研究の目的に沿って解釈した。なお，カテゴリーとインタビューの解釈に関して，共著者による「仲間同士での検証」（メリアム，2004，p.298.）を行うとともに，D小学校のK，L，X，Y，教諭とZ校長の「メンバー・チェック」（メリアム，2004，p.298.）を受けた。

2.3　実技研修会への参加

筆者と共著者の合計３名が2012年８月１日C市立D小学校で開催された地区研究会の実技研修会と2013年８月19日に開催されたC市立D小学校の校内実技研修会に参加し，実技研修に参加するとともに，実技研修会の様子を観察した。

３　結果と考察

3.1　質問紙調査の結果と考察

回答のあった77名のうち，41名がこれまで体育授業の研修内容を勤務校の先生に伝達したと回答した。他方，伝達していないと回答した教師は23名であった。さらに，その41名にその伝達方法を聞いた結果が表８である。その普及の方法は，校内研修会の開催（56％）と仕事の中での伝達（68％）に大きく分けられた。

表７　参加者の属性

性別		担当学年		研究教科		体育主任		在職年数	
男性	46	低学年	18	体育科	27	ある	15（現在），21（これまで）	5年以内	36
		中学年	30					6～10年	20
女性	30	高学年	24	体育科以外	49	ない	61（現在），46（これまで）	11～15年	5
		担任なし	4					16～20年	2
								21年以上	13

n=77（提出人数，記入欠損多し）

表８　校外実技研修を校内に伝達する方法

		伝えた人数	伝えなかった人数	伝えた人の割合％	伝えた人の割合％
校内研修会の開催	1. 校内の実技研修会で伝えた	25	16	60	56
	2. 体育部会の先生方に伝えた	21	20	51	
仕事の中での伝達	3. 同学年等の同僚に会話で伝えた	35	6	85	68
	4. 合同体育で取り入れて担当する先生方に伝えた	27	14	65	
	5. 全校朝会やクラブの時間などで伝えた	22	19	53	

n:41

回答者の約３分の２の教師は実技研修の学習成果を校内に普及していた。そして，６割弱の教師が「校内研修会の開催」で，７割弱の教師が「仕事の中での伝達」で校内への普及を行っていた。

「校内研修会の開催」は体育部会の主導で職員会議の議事調整を経て校務として実施される。それに対して，「同学年・同僚との対話」と「合同体育」で取り入れて担当する先生方に伝えた，「行事（朝会・体力づくり）で」伝えた，という普及方法は，特に職員会議で調整をしなくても行える形態である。校内全員への伝達という点では校内研修会の開催は効果的であるが，実際の授業や行事の場で実技と対話を伴いながら，実技指導の方法を伝達するという方法は，作業をする時間の負担がなく直接教師同士が対話しながら伝達するという点で効果的と思われる。

3.2　インタビュー調査の結果と考察

3.2.1　学校長へのインタビューの分類結果と考察

3.2.1.1　学校長へのインタビューの分類

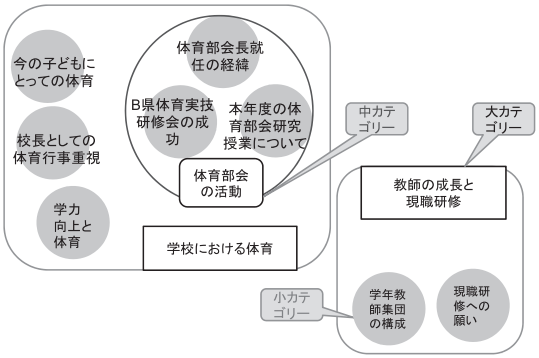

図１　学校長へのインタビューの分類結果

学校長へのインタビューは，図１に示されたように，８個の小カテゴリー，「今の子どもにとっての体育」，「校長としての体育行事重視」，「学力向上と体育」，「体育部会長就任の経緯」，「B 県体育実技研修会の成功」，「本年度の体育部会研究授業について」，「学年教師集団の構成」，「現職研修への願い」に分類された。さらに，小カテゴリーのうち，３つが中カテゴリー「体育部会の活動」に分類された。また，小カテゴリーのうち，６つが大カテゴリー「学校における体育」に，他の２つが大カテゴリー「教師の成長と現職教育」に分類された。

大カテゴリー「学校における体育」は，校長としての学校における体育に関する考え方であった。他方，大カテゴリー「教師の成長と現職教育」は校長としての現職教育の役割に関する言説であった。

3.2.1.2　学校長へのインタビューの考察

⑴「教師の成長と現職研修」（大カテゴリー）

Z 校長は，教師の研修に関して「自主研修」を重視する考え方を次のように述べた。

「若い人たちには毎年言うんですけど，学校が定めた教科研修，わが校では算数，その前は道徳ですが。これは当然，学校に赴任した以上はやらなくちゃいけない，それだけをやっていればいいんじゃないぞ，と。先生たちに全部言うんですよね，毎回。自分が持っている特性，自分のやってみたい事，これは学校がやっている研修とは別に必ず一つは自分のものを作れと。これは自主研修で，どんどん選んで学びに行くとか書籍を読むとか，それは絶対にやらないとだめだと言い続けています。」

確かに，Z 校長の述べるように教師の研修は何よりも教師自身が目の前の子どもの実態と変化を踏まえ，自己の成長と課題の解決のために行うことが最も大切である。このような見識に基づき，教師の研修を進める責任を Z 校長は自覚し，特に若手の研修について財政的時間的な支援を次のように行っていると述べた。

「そういう意味で，若い先生が研修に行きたいと言えば，『進んで行け』とか，『こういうのが来ているから行ってごらん』と積極的に推奨して，とにかく，校内以外に必ず一つ，自分のものを作れとずっと言い続けてやってます。」

さらに，Z 校長は教師の研修は「同じ学年とか隣のクラスとか職員室での語らいとか，おそらくいろんな形でされていると思うんです。」と述べ，そうした同学年の担任教師間の支援と成長を促す次のような学年編成を実施したと述べた。

「そうですね。だから，本校は特に若い教員が比較的多い学校ですし，間がいなくて，極端に言えば20代と40代，50代の塊しかないんですよ。だから学年編成をする時には必ず基本は中堅と若手。これを完璧に組んできたんですよ。それは，そこで学べることが多いからということで，積極的に学んでくれということと，積極的に教えてくれということを常に言いながら，そういうことを意識してやらせてはいます。」

学校長は，体育授業を含めた教師の成長のためには，経験豊かな教師と若手の教師の間に日常的な対話を通した支援を促すことが重要と考え学校運営に具体化していたのである。

⑵「学校における体育」（大カテゴリー）

Z 校長は，高等学校の保健体育教師を目指していた経歴を持ち，若手の時期に小学校教師として体育の授業改善に熱心に取り組んでいた。現在 C 市体育部会の会長の役割を担っている Z 校長は，小学校における体育の役割を次のように述べた。

「体育に関して今思っていることは何かというとですね，子どもたちの生活が昔と本当に変わってしまって，いわゆる，遊ぶ場所がない，時間が

ない，ツレもいないという状況の中で，小学校の体育の中で子どもたちに体を動かすこと，運動することの楽しさとか，そういったものを体育の授業で補わなくちゃいけない側面が非常に強くなっているんじゃないかなということをすごく考えているんですよ。」

しかし，行間体育を充実させている研究指定校の取り組みはD小学校では困難と次のように述べる。

「業間体育をきちんとこなせている学校って本当に少ないですよね。それは校長の力量や思いもあるんですけど，行政的に何に力を入れているかというと学力向上ですからね。どうしても国語や算数に集中してしまうので，それを高めるためには業間のところを，運動よりはドリル学習とか音読とか，そういうシステムに全体がなってますから，そこは非常に難しい所がありますね。」

校長としては，社会や保護者の学力形成の要請に応えなければならないのである。そこで体育に関しては，D校の体育主任と教務主任を兼ねたW先生を中心とした体育部会による校内及び校外研修を充実させることで体育授業の改善を行うと同時に，以下のような行事の改善を行ったという。

「子どもらが運動できる機会というのを行事的に組もうというので，去年からドッジボール大会を入れたり，今年はそれにプラス縄跳び大会も組み入れるということで計画をさせてもらって，みんなが一斉に，それに向けて動ける，努力していくような。運動も含めて学級集団，学校集団をつくる行事を増やしていこうとはしているんですけどね。」

D小学校では，体育部会を中心とした体育授業の改善を通して，体育の役割を実現していく研修が組織されていた。それは，Z校長の子どもの成長に及ぼす体育の重要な役割への信念と自主研修を重視し若手教師の研修を支援する考え方に支えられていたと思われる。

3.2.2　教諭へのインタビューの分類結果と考察

3.2.2.1　教諭へのインタビューの分類

４名の教諭へのインタビューは，図２に示したように，11個の小カテゴリー，「体育の研究指定校から学んだ体育」，「体育のメンター（体育主任）から多くを学んだ」，「体育部会や校内実技研修でネタを学んで授業で試す」，「前任校との校風の相違」，「新任の教師に伝える方法」，「学級づくり・集団づくりと体育の関係へのこだわり」，「遊びの中で感覚が身につく体育の場づくり」，「教師としての自己の体育授業に関する成長課題」，「前任校との子どもの相違」，「体育の授業改善による子どもの変化」，「教育実習の経験」に分類された。さらに，小カテゴリーのうち，３つが中カテゴリー「体育を学ぶこと」に，他の３つが中カテゴリー「体育を教えることと教師の成長」に分類された。また，小カテゴリーのうち，５つが大カテゴリー「学校の同僚から体育の指導計画・教材・指導法を学ぶこと」に，他の５つが大カテゴリー「体育を教えることと教師と子どもの成長」に分類された。

大カテゴリー「学校の同僚から体育の指導計画・教材・指導法を学ぶこと」は，教師として体育の授業を学ぶ方法や機会に関する言説であった。他方，大カテゴリー「体育を教えることと教師と子どもの成長」は，体育部会教師の体育授業についての考え方を示した言説が中心であった。

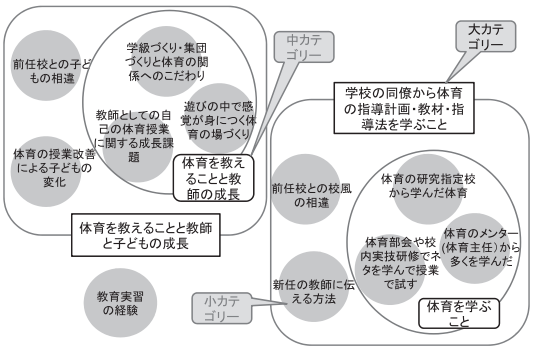

図２　教諭へのインタビューの分類結果

3.2.2.2　教諭へのインタビューの考察

⑴「学校の同僚から体育の指導計画・教材・指導法を学ぶこと」（大カテゴリー）

１）「体育部会や校内実技研修でネタを学んで授業で試す」（小カテゴリー）

D校では，体育主任と教務主任を兼ねたW先生が講師となり，毎年夏季休暇中に体育の校内実技研修会を開催してきた。また，体育部会所属の３名の教師は，C市教科研体育部会で継続して実技研修に参加し研究授業で授業を公開してきた。この体育部会による実技研修は，体育部会に所属する教師と体育部会に所属していない教師の双方に共通の効果を生んでいた。

体育部会でないＹ先生は次のように述べた。

「体つくり運動系はネタがないとできないので，いいネタを色々もらった。四角にジャンケンしていくやつとかは，ゲーム感覚でできるし。」

（すぐに授業の中で取り入れますか？）

「取り入れたいと思う。特に，９月初めにすぐに授業に入るのはしんどいので，子どもも私も。なので，そういうところから始めていけるかなと。」

Ｙ先生は，Ｂ県全体の実技研修会に参加し学んだ実技教材をすぐに自分の授業で試して取り入れるという。他方，体育部会のＬ先生は次のように述べる。

「体育部会は体育部会でネタを仕入れるというか。そういうふうな考え方だったけど，どうかなあ。」

（ネタを仕入れたくらいでは去年のような授業はできないよね。）

「あれは無理です。」

（そのネタを授業まで下して，子どもの活動にどう具体化しているの？）

「単元ごとを考えるっていうのは無理ですね。そのネタを使って最初の体ほぐしをしたりしていましたけど。ボールを跨いでキャッチするのとかは面白そうだなと思ったから，準備運動とかゲームみたいな時に使おうかなと思いましたけど。」

このように，実技研修の効果を授業で使える運動を教材（ネタ）として仕入れることに限定して捉えている。

２）「体育の研究指定校から学んだ体育」（小カテゴリー）

それでは，体育の研究指定校に所属する教諭は，単元計画の作成や，授業の場づくり等の知識や技能をどのようにして学んでいるのであろうか。体育部会所属のＬ先生は，同僚の先輩から先輩の前任校の体育研究指定校の成果を学んだことを次のように述べた。

「こういうふうにもできるよって話を聞いたりとか，Ｅ小の時の指導案とか見せてもらったりとか。単元計画とかも全然違うんですよ。この学校は道徳ですけど，体育の研究校ってすごくしっかりしているというか，一貫性があるというか，こんなふうにやらんといかんのんだなってモデルを教えてもらって。」

Ｌ先生は，縦軸に分刻みの１時限の内容，横軸に単元全体の内容を示し，単元の目標と評価基準を示した単元計画のモデルを教えてもらい，Ｃ市教科研体育部会の研究授業の資料作成で用いたのである。

ただし，体育を研究教科としていた前任校から赴任したＹ先生は，個に応じた指導を具体化しようとして，Ｄ小学校の体育用具の不足への不満を次のように述べた。

「学校にすごく教材が揃ってて，もちろん体育倉庫もだし，外の体育倉庫もだし，プールの体育倉庫もだし，あと，本やら資料やら。一生懸命，何年もかけて揃えてたので，面白い授業が作りやすかったのでよかったなと思いました。この学校に来て，今まで培ってきた授業の作り方とかは，これからも，こっちでもやっていきたいと思っているんですけど，教具がないとできない。」

体育の研究指定校や体育を研究教科とする学校は，確かに体育の専門的知識や技能を普及するために重要な役割を果たしてきた。しかし，条件や施設の異なる学校では，そこで得た専門的知識や技能を具体化することが困難な場合もあることがわかる。

３）「体育のメンター（体育主任）から多くを学んだ」（小カテゴリー）

校外研修の成果を校内に伝達する方法としてアンケートでは「合同体育」や「同僚に会話で伝える」ことが多く用いられていた。体育部会に所属していないＸ先生とＹ先生は次のように述べて，体育の知識や技能を学ぶその過程を語った。

（昨年１年間，Ｄ小の体育主任Ｗ先生と同学年の合同体育のティーム・ティーチングで授業を担当し，T2の役割を果たしたとの説明に続いて：引用者注）

（Ｗ先生の授業を見られて，こんな所がすごいとか，これはいいとか思われましたか？）

「説明がＷ先生はすごく少ないから，子どもたちを例にして，すぐに活動に取り組んで，運動の時間がすごいよくあるなって，子どもたちも喜んでいるんですけど。」

Ｘ先生は，短い説明で子どもの運動時間を保障し，子どもに示範をさせるＷ先生の指導法を合同体育で一緒に授業を担当した経験から学んだという。

また，Ｙ先生は，前任校の同学年の体育主任と日常の対話を通して体育授業の知識を得たことを

次のように述べた。

「その時は主任が同じ学年でやってくれていたので，『こんなのはどうですか？』とか，実際に言えたし，『いいよ，やってみよう』って，しかもフィードバックも一緒にしてくれて，『あれはちょっとあれだったよね，こうした方がよかったよね』って，お互い話をしながら，『じゃあ，次の時間はこれやってみます』ってやって，どうでした，こうでしたってお互いに話して，こういう本があるよって見せてもらったり。だからやっぱり，主任はきっと体育を広げていきたかったって思いもあって，私にしてくれたのもあるんだと思うので，体育の考えを広げてくれる存在がいることが。」

小学校では体育に関して専門的な知識や技能を持つ体育主任が，新参者に対して専門的援助をするメンターの役割を果たすことが重要であることがわかる。

4）「前任校との校風の相違」（小カテゴリー）

もちろん校内の同僚間の支援は，学校の校風や保護者の要請などから困難を抱える場合もある。赴任後４ヶ月でまだ職員室の同僚と授業について率直に話し合う関係を作れていないもどかしさについてＹ先生は次のように述べていた。

「（赴任して４ヶ月たち前任校のように体育授業に関して話をする機会がありますかの問いに対して）そんなにないと思うんですけど，話す機会がないっていうのが大きいかも。前の学校は職員室の中で授業について話していることがすごく多かったんです，体育だけじゃなくて。国語だし算数だし，全部話してて。」

⑵「体育を教えることと教師と子どもの成長」（大カテゴリー）

1）「遊びの中で感覚が身につく体育の場づくり」（小カテゴリー）

中堅のＫ先生は，遊びの中でうまくなる場づくりを工夫することを前任校の体育研究指定校で学び，自分の体育授業の考え方として確立し，Ｄ小の体育授業に具体化していることを次のように述べた。

「見た時に，去年のクラスは特に女の子たちが怖がってるんですよ。跳び箱という物自体を。だから，それをどういうふうに授業を組み立てていくのかが，まず一時間目ですよね。どんなふうにしようかと思った時に，跳び箱って高いけど，手を付く位置が腰より高くて，体も前のめりになって怖いかもしれないけど，あのフワッてする感じが面白かったり気持ち良かったりっていう感覚を味あわせたいなと思ったので，遊びは，高い所からジャンプするっていう動きを入れた鬼ごっこ。」

そして，Ｋ先生の授業を観察した若手のＬ先生は，同じ体育部会の先輩のＫ先生から遊びの中でうまくなる体育授業を学び，授業の考え方を変えて採用２年目の体育部会の提案授業に具体化したと次のように述べた。

「どうやって技能を身に付けさせようかっていう考えの方が強かったんですけど，遊びの中で身に付いてたらいいというか，遊びの中で楽しみながらやる，体育嫌いを作らないようにしていくっていうＥ小のスタイルというか，鬼ごっこから始まるとかっていう話を聞いて，なるほど，そんな考え方もあるんだと思いながら過ごすじゃないですか。」

2）「学級づくり・集団づくりと体育の関係へのこだわり」（小カテゴリー）

さらに，Ｋ先生は子どもの信頼関係を軸にした学級づくりの信念と体育授業との関係を次のように述べた。

「そうですね。小学校の体育が好きなのも，体育と音楽は学級が良くないとできない科目だなって思っているので，体育とか音楽の授業を見れば，先生と子どもの信頼関係とか，子ども同士の信頼関係がすごく見えるから，シビアではあるけど，そういうところが魅力的だと思います。」

Ｋ先生は，学生時代の児童自立支援施設でのボランティアを踏まえ，集団づくりに力点を置いた学級経営を志向し，集団づくりの観点から体育授業の効果を重視していた。そして，同じ体育部会に所属するＬ先生は，次のようにこの点でもＫ先生から大きな影響を受けていると述べた。

「（Ｋ先生の影響を）受けていますね。最初，隣のクラスだったんですよ。Ｋ先生が３年２組，僕が４年１組だったんですけど，全然違うんですよ。向こうは３年生でこっちは４年生じゃないですか。３年生で，規律とか取れてるけど生き生きしてるというか，キュウキュウ締めすぎてないというか。こんなふうになったら楽しいだろうなと

思って，間違えてもいいけど自分の意見は言わんといかんとか，友達の事を思いやるとか，そういう集団を作ってたんですよ，見た感じ。」

L先生は，体育部会の先輩の同僚の集団づくりに力点を置いた学級づくりに学び，学級担任として集団づくりと体育授業との関連を考えて，体育授業で子どもを褒めたり叱ったりするようになったという。

3）「前任校との子どもの相違」（小カテゴリー）

K先生は，体育研究指定校であった初任校のE小とは異なる子どもの楽しさが体育の授業で生まれたことを次のように述べた。

「だから，何か，運動に対する心構えがE小（前任校）の子とは違うので，ある意味，授業をしていてすごく面白いところはあります。どんな事を投げかけてもすごい乗ってくるんですよ。『楽しー』って。さっきの『猫とネズミ』なんかはE小の子はみんな知ってるので，だから自分たちで工夫していくのが楽しい。僕があまり口を出さずに，自分たちでやっていくのが楽しいんですけど，ここの子たちは，『先生が一緒に体育をしてくれて楽しい』，『そんな遊びがあるなんてすごい』みたいな感動はあるので，やりがいはあるなって思います。」

K先生は，前任校で学んだ遊びの中でうまくなる体育授業が，前任校とは異なるレベルの子どもの意欲や関心を引き出したことに充実感を得ている。

4）「体育の授業改善による子どもの変化」（小カテゴリー）

K先生は体育授業の意義を次のように述べた。

「E小の時は全然分からなかった，それが。自分が授業を，単元を作っていくことで精一杯で，子どもたちがただやらされているというか，みんなちゃんとやってるんだけど，だけど，色んな知識とか遊びを知っている分，ここの子たちほど関心というのが見つけにくかったんですけど，前の学校は。ここの学校は何をしても楽しんでくれるので。」

若手教員として前任校で学んだ単元計画と遊びの中でうまくなる体育授業は，D小の子どもにとって新鮮であったため，体育授業が変わると子どもが変わることを実感したという。

体育部会に所属する中堅のK先生は，若手のL先生のメンターとして単元計画のモデル，遊びの中でうまくなる体育授業の場づくりや指導法，集団づくりに基づく学級経営という専門的力量に関して支援を行っていた。校内の体育部会にはK校長の意図した中堅と若手の教え学ぶ支援の関係が生まれていることがわかる。

5）「教師としての自己の体育授業に関する成長課題」（小カテゴリー）

運動が苦手な教師は実技の技能に不安を抱えている。X先生は，実技研修に参加しても残る不安を率直に以下のように述べた。

「やってみて，今まで知らなかったことを知ることができて，ちょっとでも自分の授業の足しになったらいいなって思います。知らなかったことがわかるようになって助かります。でも，実際に自分が体育の技能がないので，実践するのが難しいなと思ったりもします。」

体育部会に所属しないX先生にとって，昨年同学年を担任したW体育主任の指導による校内実技研修は授業改善にプラスになっているが，体育授業を指導する際に自分の実技力に不安を抱いていることも事実であるという。

4　まとめ

質問紙調査から，地区研究会体育部会の実技研修の成果は，「校内研修会の開催」と「仕事の中での伝達」で校内に伝達されていたことがわかった。さらに，D小学校でのインタビュー調査によれば，「校内（校外）実技研修会の開催」での伝達は，小カテゴリー「体育部会や校内実技研修でネタを学んで授業で試す」に示されたように，紹介された運動を授業の新しい教材（ネタ）として教師Y，Lが授業で指導する成果を生んでいた。

これに対して，「仕事の中で伝達」は以下の成果を生んでいた。体育部会に所属していない教師X，Yは，体育主任と体育授業を合同で指導したり，日常的に体育授業に関する対話をしたりすることにより，体育の指導法や知識を学んだ。さらに，体育部会の若手教師Lは，中堅の教師Kから体育授業の単元計画作成，指導法や場づくり，学級経営についての力量を学んだのである。特に体育主任と同僚の間や体育部会内の同僚の間にメンターとメンティーの支援の関係が日常的に作られ

ることが重要と思われる。ただし，同僚教師の間に日常的な支援の関係が作られるためには，「前任校との校風の相違（小カテゴリー）」の教師Yのように，職員室の雰囲気の前任校との相違にとまどっている教員に対する配慮が必要である。

また，D小というひとつの学校の事例からではあるが，地区研究会体育部会の実技研修の内容が「校内研修会の開催」と「仕事の中での伝達」で校内に伝達され，教師の体育授業の力量を形成する成果をあげていた。さらに，これらの成果をあげるために，校長の体育授業と現職研修に対する考え方が大きな役割を果たすことが示唆された。

地区研究会の体育部会は，実技研修会以外に，指導計画作成や指導法及び評価の授業研究を目的とした研究授業と協議会も行っている。D小の教師へのインタビューの中にも研究授業と協議会への参加による力量形成の事実が語られていた。今後，研究授業と協議会に参加した教師を対象とし，そこで学んだ内容を校内の同僚とどのように共有するのかに関して，さらに検討することが課題として残された。

付　記

本研究の一部は，科学研究費補助金（基盤B）課題研究番号24300212の補助を受けて行われた。

注

1）山崎準二（2002，pp.217-218.）によれば，「地区研究会」は，「勤務校の所在地域ごとに学年・教科・領域別に部会が組織され，ほぼ全員がいずれかに参加する形をとっている教育研究会であり，形式上は全員参加が基本であるが，各教師個人にとって『力点を置いて継続的に参加している』ということになると約２割程度しか意識されていない実態が示されている。」とされる。本稿では，地域により多様な名称で呼ばれているこの現職教育の研究会を山崎準二（2002）に依拠して，地区研究会と呼ぶことにする。

2）木原成一郎他（2012）によれば，メンタリングが，学校に新しく参入する若い教師の成長を励ますための中堅教師の職能として必要な力量として注目されている。メンタリングを行う人はメンターと呼ばれ，メンターの典型例は教員養成において教育実習生を指導する学校の指導教員である。

文　献

1）川喜田二郎（1967）『発想法』中公新書
2）木原成一郎（2007）「初任教師の抱える心配と力量形成の契機」グループ・ディダクティカ編『学びのための教師論』勁草書房，p.29-55.
3）木原成一郎他（2012）「『若手教師』の成長を支えるもの」グループ･ディダクティカ編『教師になること，教師であり続けること』勁草書房，p.93-114.
4）木原俊行（2004）『授業研究と教師の成長』日本文教出版
5）松田恵示･原祐一（2013）「小学校教員のキャリアパターン・ライフサイクルによる研修意識の変化」日本体育科教育学会第18回大会ラウンドテーブル「小学校教師の体育授業の力量形成を支える現職研修の在り方を考える」配布資料
6）メリアム（堀薫夫他訳）（2004）『質的調査法入門』ミネルヴァ書房
7）村井潤他（2011）「小学校教師が現職研修に求める機能に関する事例研究―体育科の校外研修の参加者に対するインタビューを手がかりに―」『広島大学大学院教育学研究科紀要第１部』第60号，pp.73-80.
8）山崎準二（2002）『教師のライフコース研究』創風社